

わが愛する歌

— 名歌鑑賞 —

二反田 實

うちつけにまた来む秋のこよひまで月ゆへをしくなる命かな

西行（山家心中集）四十番歌

中世という時代を、はっきりと、いつからいつまでという風に今ここに示すことは出来ませんが、十二世紀をほとんど生き切った「西行」の歌は、「月ゆへをしく」という「自我（エゴ）」を詠いながら、「を（お）しくなる命かな」とふと「自己（おのれ）」に我欲を「うちつけ」てみせながら一種の「をかし」を認識させているような様子は、「我と己」を、すでに知っている詩人の魂を感じます。これこそ私の愛する「中世」のにおいなのです。

中世のおひこそ、日本史の中でも全く特異な鎌倉新仏教の祖師達の誕生の根本的な原因であり、二度と来ることのない「時代精神」であったのではないのか、そしてこの精神こそ「怨霊と冥罰」の王朝国家をのりこえて、迷信と信仰をはっきりと区別する人間を生み出した原因なのではと考えるのです。

月こそ人間、自分そのものであり「われとおのれ」の合体した「自然物」そのものとしての「法身（ほっしん）」ではない「現身（うつせみ）」である、とはっきりと宣言している如き「中世人の強さ」を私はこの歌の中にみるのです。現代でも人気のある西行には、多大の研究者がありこのような小論を書くのは自責の念も有りますが、中世を忘れない日本人として生きたいのです。

卷頭言

明治三十五年九月十四日朝、正岡子規はガラス障子の外に夏の終わりにゆく中庭を眺めながら、高浜虚子に口述筆記させる。「……たまに露でも落ちたかと思ふやうに、糸瓜の葉が一枚二枚だけひらひら動く。其度に秋の涼しさは膚に沁み込む様に思ふて何ともいへぬよい心持であった。何だか苦痛極って暫く病氣を感じないやうなもの不思議に思はれた……」そして、五日後の九月十五日午前一時、三十六才の若さで死去する。

正岡子規は、発句から俳句、和歌から短歌への革新を短い生涯のうちで成し遂げた。子規が短歌の革新に取り組んだのはカリエスが悪化し、殆ど寝たきりの生活を強いられた時期。病身を鼓舞して新聞「日本」に『歌詠みに与える書』を発表した。何事にもすべて実証的であった子規が俳句においても短歌においても革新したのは「写生」である。死の床にあっても、夏の終わりの中庭を、虚子に口述筆記の写生をさせる。「糸瓜の葉が一枚二枚だけひらひら動く」。骨の髄まで写生精神に貫かれていたのである。二尺ばかりの薔薇の芽に触れて見たくて花壇に向かう、さすれば、針やはらかに春雨が降っていたのである。

斎藤茂吉は「写生トイフコトハ、生ヲ写スコトデアル、生ハ即チいのちノ義デアル」として「實相に観入して自然・自己一元の生を写す。」これが短歌の写生であると言ふ。

子規と茂吉の詩精神の原点を今一度考えたい。(松岡)

太陽の舟 目次

三十二巻 九月号 (通巻三〇九号)

わが愛する歌 — 名歌鑑賞 —

二反田 實

卷頭言

松岡 三夫

二十五首詠

森田 勝昭

阿部正路論 (第一〇七回)

須藤 宏明

歌誌散見 (第八十三回)

豊泉 豪

作品Ⅰ

塚本 正子 他

六月批評 (作品Ⅰ)

宮島 マツエ

(作品Ⅱ)

鈴木 熹子

合 評 (座談会)

角田 順子・土方 澄江

選者十首

酒向 一次・渡辺 幸子

秀歌抜芳 (三〇七号)

高崎 邦彦

作品Ⅱ

井上萬里子 他

作歌の目・作歌の技法 (第六十八回)

三木 勝

書評『ピエロの影』

角田・山田 (紀)・松岡

歌会・支部報告 他

編集後記

編集後記

角田・山田 (紀)・松岡

題字

阿部正路

表紙

イラスト 阿部正冬

終の棲家か伊豆平野

森 田 勝 昭

一面が湖の如き早苗田に鉄塔浮かぶ田方の平野

陽に映えてビニール棟が田に写り空も田んぼもキラリと光る

早苗田は蛭ガ小島の名の如く田方平野は水面に変わる

その昔蛭ガ小島の殿として頼朝は立てり天下目指して

数十年転勤族で仕事旅富士・狩野川が吾を迎える

この町が終の棲家か伊豆平野転勤族の吾の終点

吾が人生終の棲家のこの町に導かれたか辿り着いたか

新しき故里となりしこの町よ田方平野は白鷺が舞う

頼朝と田方平野と富士山と新しき里は佳き都なり

川土手の奥に君臨デカイ富士伊豆半島の根っこの吾が町

端正な襟元思わす夏姿浴衣模様の富士光る里

梅雨空で今日も姿は見えねども心の景色は富士夏姿

綿の冬浴衣模様の夏も佳し眺め飽かなき富士と自然と

自然とは思えぬような端正な富士の姿に魅せられゆく日々

今年また木之花姫に魅かれてか富士登山計画着々進む

五月雨を河いっぱいに飲み込んで狩野川濁流まさに疾走

絵はがきのような狩野川奥富士の吾が里にはまた旧街道あり

北条氏の郷土でありたる伊豆の国確かな歴史のその上に立つ

いにしえの声も聞こえる旧街道ロマンの香り溢れいる里

歴史道いにしえびとの声求めロマンに浸りつ街道を往く

旧道のセピア色から抜け出せばランドセルの児ら蝶の如くに

この町のわがお気に入り古き道狩野川堤の静かな散歩

頼朝の戦勝祈願の小さき杜吾もならいて今後を祈る

静かなる歴史の街も騒ぎおりFIFAの大波押し寄せる日々

デンマーク戦快挙の朝の散歩道スタンディングウェーブのような風吹く

阿部正路論（第七回）

阿部正路論

須藤 宏明

―短歌の未来を支える伝統の呪縛、型式―

『終焉の文学』（五月書房・昭和三十五年）は阿部正路、二十九歳の時の著作である。それまで、いくつかの歌集を上梓してきたのが阿部であるが、評論集・論文集としては、阿部の最初の単著である。前年に國學院大學大学院博士課程を修了した阿部は、この著書の略歴で「日本学術会議（東京都台東区上野公園内）に勤務している」と記している。この年の十一月、阿部は結婚をし、柏市緑が丘に住む。翌年、國學院大學文学部講師となる。阿部はこの著作を刊行した時、公務員という立場の新進気鋭評論家であったのだ。評論家としての気概が、この著書の表紙の下に記された「阿部正路エッセイ集」というロゴに示されている。「エッセイ」と記されているが、内容は実に鋭く、まさに剃刀のような切れの論旨と、文献を多様に用いた確かな実証を持つ。

フランス語でのエッセイは、日本語での随筆とは違い、「自由な形式で自分の見聞・感想・意見などを述べた散文。ある特定の主題について論じた文。小論文。論説。」という意味だが、この著書はまさにフランス語で言うところの小論文集である。学問として短歌を論ずるのではなく、自由な形式で

短歌の現状と未来を論じた書物である。『終焉の文学』はまさに、阿部の文学の原点、即ち阿部にとっての短歌の必然性が語られた書物である。阿部は、短歌否定が横行していた所謂「第二芸術論時代」という流れの中で、

僕らは思惟の中で雪崩れのように短歌におもひてゆく自己の感情を押さえることが出来なかった。それはまさに、「あるかなきかの光を求めて、薄明の廃墟をさまよう人間」（大野誠夫・薔薇祭）のすがたでもあった。だが、常に伝統を憎む心が逆に伝統的な文学にむかわせ、型式の呪縛を憎む心がその解放を希つて逆に型式を僕らに選ばせた。（二頁）

という意思表示をしている。「あとがき」には、

僕の生涯のテーマは、「短歌の発生に関する研究」であり、この『終焉の文学』は、その序論ノートに他ならぬ。歌・その終焉の文学（Waka in last stages）は、また、僕の生涯の執着になるだろう。歌を憎みながら、結局僕は歌と離れることが出来ないのだ。

と決意を述べている。ここで、阿部の言う終焉とは、発生の対義語であることが示されている。つまり、終焉とは文学のもっとも新しく、完成した形を意味しているのだ。現在から未来に向けての可能性を、終焉という言葉の意味に内包させている。この終焉を保証しているのが、短歌のみが持つ伝統という呪縛の型式である。阿部は、生涯この型式と離れることが出来ず、真摯に格闘した。その決意が二十九歳の初刊に記されているのである。

歌誌散見 第八十三回

豊 泉 豪

「レ・パピエ・シアンⅡ」④

前号に続き、「レ・パピエ・シアンⅡ」十六号（二〇一〇年四月）から短歌作品を鑑賞する。

・従順の海豚蔑して吹くしほの鯨の不敵も飼ひならされて

黒田 瞳

従順な海豚を蔑み、不敵に潮を吹きあげる鯨。しかし、鯨も所詮は飼ひならされている。従順も不敵も、システム化され、管理された枠の中での役割でありポーズであり、さらに言えばスタイルやファッションに過ぎないのかも知れない。人間とその社会への批判が込められた作品として読んだ。

・音のせぬ雨の日曜あなたから主語を省いたメールを貰う

平岡 ゆめ

主語を省いた会話や文章は、近しい間柄でやり取りされるものだが、その関係が移行途中で微妙な段階という場合もある。「あなた」という二人称と結句の「貰う」という表現から、受け取ったメールを少なくとも不快には思っていないことが判るが、自身はまだ主語を省いた会話をするには至っていない。人間関係にまつわる日常の小さな心の動きを切り取っている。静かな雨の日曜という場面の設定も効果的である。

・あやまちて指に潰せし夜の蜘蛛わがうちに細き糸ふるへだ

す

山吹明日香

二首前に「曇天に染井吉野の咲き満ちてここだけ薄き冥府との壁」がある。外界と内側、あの世とこの世との境の薄さ。うっかりすると自分の中に入り込んできそうな外側と、向こう側に行ってしまうようになる自分。細かくふるえる蜘蛛の糸の質感が、繊細で過敏な感性をそのまま表わしている。

・ありつつに在れどありふれどあり果てて寂しく咲きてゐし

山櫻

角田 純

時に栽植されることもあろうが、「山櫻」はその名のおり山に自生する木である。人間の意思や存在にまったく関わりなく、はるか昔からただひたすらそこにあり続けてきた。上の句の「あり」の執拗な繰り返しにより、「へただある」ものとしての「山櫻」の姿が描かれ、その「存在」に寄せる作者の心情が「寂し」として導き出されている。

・山に沿ひ霧ひんやりと降る町の入居募集の字のやうに泣く

キタダヒロヒコ

「入居募集」の文字は、今現在の「不在」を表している。山沿いの冷たい霧に閉ざされた町の「入居募集」には、なかなか、あるいはとうとうやって来ない人を待つような寂しさが漂っているのだろう。結句のやや構えた表現によって、寂しい町のウェットな風景が感覚的に描かれている。

自己の内面に迫る歌にも、社会や世界に目を向けた歌にも、確かな表現力を感じさせられる作品が多かった。質の高い同人誌である。（「レ・パピエ・シアンⅡ」の項、了）

七月批評（作品Ⅰ）

宮島マツエ

・学問もせで「就活」にとび回る慣らひをかき国の行く末

山本 賀子

現在は大学三年から、就活開始が通例となり、一番大事な学問に没頭する時期を、就活に費やしている。本人にとっても国の将来にとっても、憂うべき状態と作者は嘆く。

・青葉風いちよの幼葉に光りさし朗読きこゆ教室の窓

鈴木 喜子

春 希望に満ちた新学期、小学校の側を通ると、子供達の威勢のよい朗読の声が聞こえてくる。その声を聞きながら、日本の未来を担う子供達へ、愛のメールを送る作者。

・雑草の小花にるりのしじみ蝶一日の糧をけんめいに吸ふ

玉川 愛子

小さなるりのしじみ蝶が、花の中にもぐって一生懸命に蜜を吸っている。この可憐な蝶を通して、あらゆる生物は生きる為、種族保存の為、努力している事に作者は感動。

・その上のいかなるものの生なるや太古の土に貝はまみれて

永野 昌子

縄文時代の貝塚でしょうか。土にまみれた貝を見て、はるか太古の人の暮しを想像してみる。衣食住のなりたち、追求すれば奥が深い。考古学の好きな作者ならではの作品。

・つくづくと永く生きしと想う時一瞬と思ふ時吾が一生は

湯本 いと

那須全国大会参加者の中で、最高齢者が作者です。今回は阿部先生のお好きな、唱歌「冬の夜」を絶唱。もっともっと長生きをして、短歌を作り続けてください。

・千手のやうな根のしっかりと土摺む形に果てしどうだんつじ

中村 陽子

長い年月、庭で家族を楽しませてくれた、どうだんつじが枯れてしまった。「千手のような根のしっかりと土摺む形で果てた。」この表現に無念の思いがひしひしと伝わる。

・新築の神主豪邸セコムして何をこばめる高き石塚

末次 房江

神主という神に奉仕する家の新築。出来上って見れば、セコムが取り付けられ、周りは高い石塀に。やはり世相を反映しての建築に作者の納得した様子が目に浮かぶ。

・花好きも極まりし友道の辺の小草の花も見捨ててゆけず

杉山 榮子

芯から花好きの友は、花屋さんの美しい花よりも、道端に咲く小さな花に吸いよせられる。名前も勿論知っていれば、小花に纏わる話も次々と。一緒に歩くと教わるばかり。

・意志持たぬ面と変はりし母の眼に体裁を説く吾がゆれおり

富永 道子

日々感情を持たない母と変わってゆく。その母との葛藤が、一首全体にさりげなく歌われている。そこに読者をさそう余情があり、限らない虚しさがかみしめられる。

七月批評（作品Ⅱ）

鈴木 熹子

・千年の木霊宿せる滝桜薄陽に輝う花ぞ艶めく

上田やい子

地が温み木々の芽が動き、草花が色づき、実を結ぶ生命の輝く春を詠める短歌の中から選ぶ。まず掲歌は名木の滝桜に輝る光の中に千年の古人の木霊を感じる人の心の豊かさが伺える。光源氏は桜の下で宴を開いていたのでしょうか。

・娘らと妻登り下りのなだりなか笑みて染まりて芝桜色

奥田 清

一面の傾りの小路に遊ぶ人々の中に妻と娘さんの動きを追う作者の目に幸を感じる。芝桜の絨毯に平和な情景が浮び癒しの届く一首。

・みどり・赤・黄色織りなす花園は野点に遊ぶ春の人々

梶川喜與志

錦織りなす華の宴に人は身も心も伸び伸びと遊ぶのは昔も今も「遊びをせんと生まれけん」の世界、今宵も爽やかな気分を味わっている人々の様子が浮ぶ一首。

・つつじ咲く隣あじさいつばみ有り季節のバトン次々渡し

尾上 貴子

春の花々のバトンにスピードがあり、青葉までの急しなさは一世の命の輝きを感じさせる。花それぞれの個性に胸がおどりと出す。春の華やかさを詠める一首。

・散り敷ける牡丹花弁まだ保つ生の重さを掃き寄せてをり

木村恵美子

花弁が地に伏して色鮮やかなまま残っている様子。柔らかな

な花びらの儚く終わる牡丹の一世を思いつつ掃き寄せる人の命と重ねて詠める一首。

・蜜蜂のささやきのごとき羽音して藤の花房かそかに揺らす

木村百合子

蜂と藤の花のかすかな羽音と房の揺れに春の生命の息づかいを詠まれる心の細やかに深呼吸しながら情景を共有した一首。

・里芋の蒔きどきこぶし咲く頃に天候不順で遅れて蒔きぬ

久保田美智子

農時の花どきが耕作日記に記されその歳々の天候不順は生活の不安まで引き起こす。里芋の植えどきは収穫の季まで予想される。豊作を願う一首。

・歩けども続くつつじの花の中蝶々となりてひらり飛びたし

河野 静子

つつじの花と蝶と散策する人の歩みを、時には蝶となって飛びたいと思う長閑な春の味わいが表現され、浮かれ出したくなる一首。

・春ならぬ苗田に桜逆立ちて写る桜に小えびの跳ねる

酒向 一次

田おこしの春の張田の水鏡は美しい。冬ごもりしていた小えびが飛び跳ね、桜の光に舞っている情景。生命の躍動を感じ歌人の心も急しく動き出した一首。

・菜の花も花大根も莢となり季節は移る早苗の五月

近藤 リイ

五月の天候に急かされ、菜の花・花大根は実を結び始め青葉に隠れ静かに成長する。稲田には忙しく人々が動きまわる季節が浮かぶ一首。

合評

座談会

司会 では、合評を始めます。今月は七月号掲載の中から四首選んで行います。まず最初は、品川支部の月田藤枝会員の「生きて負ふ苦は当然のなりゆき」と妣は言ひつ今吾の思ふです。如何でしょうか。

Y 作者は今、心身ともに苦勞の多い時期を過ごされているので、お母さまの言葉を実感として受けとめておられるのだらうと思います。「当然のなりゆき」という言葉に、深い意味があるのではないかな、と思います。

S 私の母も作者のお母さまも明治生まれで、明治の女性の考え方だと思います。私は「今吾の思ふ」の「の」は「も」にして「今吾も思ふ」の方が良いと思いましたね。

I この作者は、今現在、大変な生活を送っているそうですが、作者の生活を知らない読者は、この歌をどう解釈すれば良いのかと思います。

司会 作者の生活の背景を知っているか知らないかで解釈に大きな違いが出るだらうと思いますね。

T 「生きて負ふ苦は当然のなりゆき」は昔も今も人生の一つの真実です、だから作者は今の自分にその言葉がぴったりだと言っている。でも「思う」は説明的。例えば、結句を「吾も生きて負ふ」に直すと、歌に締まりが出来てくるし、余韻も出てきます。

Y 「吾も生きて負ふ」にすると、前向きでとてもいい歌になりますね。

T どうしても歌の中心が思うである以外は「思う」は使わないようにしたい。我々も気をつけなければなりませんね。

司会 それでは、次は大磯支部の土方澄江会員の竹筆で描きし絵文字見いりし吾も書けるか一本購うです。Iさんからどうぞ。

I この歌は素直だけど素っ気なくて、肉が無くて骨格だけ、という感じがしました。

S 三句目の字足らずが気になりましたね。

T そうですね。四句目の「吾も書けるか」を「吾も書きたい」と直して、自分の気持ちを強く出した方が良いでしょう。この歌を口語調に直して、「竹筆で描きし絵文字に見入りたり吾も書きたい一本を買う」としてみました。絵文字に見入っている自分の感動を表現すると、もっと歌に深みが出てくると思う。

S 「吾も書けるか」と疑問句のままで終わらない方が良いでしょうね。

司会 竹筆を一本買った、という行為だけを詠むのではなくて、もっと自分の気持ちを出す、と言うことですね。

S 私は絵文字ってどういうものか見たことが無いし、竹筆も現物を知らないで想像ができませんでした。

Y 絵文字は象形文字のようなものでしょうね。

T そうですね。絵文字は象形文字の前段階と考えられていて中国ではよく書かれているし、竹筆は毛筆の前に使われていたものでいろいろな形があって、太い線から細い線まで書くことができるそうです。「筆」が竹冠なのはそこに由来し

ています。

司会 自分の感動を表現すれば歌にもっと深みが出てくる例でしょうか。では三首目の渋谷支部の丸山孝一郎会員の

煮炊きする湯治の姿消え去りて車溢れるリゾートの地に
(八幡平) 入ります。如何でしょうか。

S 確かに今は、湯治場で煮炊きをする姿は少なくなっていると思いますが、「消え去りて」は、一寸、強い感じがします。「湯治の姿今は無く」ぐらいが良いと思いますけど。
I リゾート地に車が溢れているのを見て作者は残念がっているのでしょうか。

Y 括弧して(八幡平)と書いてありますね。

S 作者の他の歌を読みますと、括弧で地名が付いている歌がほとんどですが、そういうのはどうでしょうか。

T そう。そこを直してほしいです。地名はできるだけ歌の中に詠みこむ事です。この歌の場合、「リゾートの地」を取って「八幡平に車溢れる」に直したいですね。昔は湯治場は全国にあったので、作者としては昔の暖かい人間の姿が無くなったことを残念に思っているのでしょうか。

司会 旅行詠を詠む時、どうしても報告歌になりやすいけど、どういう事に注意したら良いでしょうか。

T 先ず、地名を入れた方が良いでしょう。一首の中に場所を暗示させる具体的なものが読み込まれている場合は、地名を入れなくてもよいのです。同じ作者の歌で、「宝玉といふべきお釜」というのがあります。「お釜」が入っているので、蔵王を詠んでいるのがわかります。

司会 最後の四首目は、大田支部の井上萬里子会員の

これ以上云えば心が崩れゆく掬える水の手よりこぼるる
です。どなたからでもどうぞ。

S 極限の感情の状態というのでしょうか。言いたい事を言わずに耐えていたら、心の表面張力が崩れてしまう、という心理状態を上手に詠まれていると思います。非常に繊細な心の持ち主だと思います。

I この歌は言葉が綺麗でし、どぎつい表現もないし、とても良い歌です。

T 抽象と具象が、上句と下句が両方綺麗に支えあって、みごとな緊張感を創りだして上手くいっている歌です。

I 曖昧な言葉を使っていない。「崩れる」とか「こぼれる」とか、はっきりしたイメージが出てきますし、これだけの表現が来ている。

S 短歌のお手本になるような歌ですね。

I 意味が不確かな言葉などは一つも無くてとてもいいです。

Y 作者は非常に我慢強い方ですし、現在病氣療養中なので、私はよく解ります。

S 作者の背景を知っていてこの歌を読むと、また作者のより深い心がわかってきますね。

T 確かにそうですけど、「仲間誉め」の危険性もありますから気をつけないと。でも、この歌は素晴らしいです。

司会 今月はそれぞれ詠みぶりの異なる歌を取りあげることができました。本日はこれで終わります。ありがとうございました。
(記録 山田紀子)

選者 角田 順子

昨日よりいちょうのみどりの濃き様を詠みあぐねてる間熱
意のさめる

生稲 進

延び延びになりし春日の宮参り社に響く結愛ちゃんの泣く

伊藤 モト

「遅くても全力で行け ヨーイドン」教師の声に駿馬のひ
びき

今井 芳枝

千年の風を纏いし滝桜命そそぎてゆるぎなき花

上田 やい子

茅葺きの家訪ねたり縦横の柱の妙に古人を敬ふ

遠藤 剛

仏壇を掃除する長男の健気なり線香焚きてほのかに匂ふ

河口 礼子

往年の役員たちは顔合せ己ばかりの話ゆき交う

北川 昭

〈菜の花号〉へはやとの風〉の客となり春陽の中旅にほろ酔
ふ

久保田 昭江

捨てた分スペース空いた衣類箱こころの整理映し出してる

狐塚 秀子

丸鬘の母に抱かれしベビー服着せられしわれ写し絵七十余
年

河野 静子

選者 土方 澄江

五月晴れ亡き弟の歳数え鯉の泳ぎし里の屋根うく

鈴木 薫子

入院して空気のような夫のこと今改めて有難く思う

菅谷 孝子

時ならぬ冷たき風に揺れながら笑ひさざめく若葉の櫛

武田 節子

酸素ボンベ子供だと言ひて引き連れぬ歌会に励みし君忘れ

照山 好子

母の日にカーネーションをひとつ買い母おることに感謝す

豊島 英明

☆波打てる麦の畑のさわさわと浪のうねりの果てる果てまで

三木 勝

一とせを時たがへずに見とどける自然は正しく移ろひ見す

宮井 富美

筍の葉を捲るさへ母恋し梅干包み紅さしくれば

相羽 照代

☆廃屋の庭に咲き出す花なれば愛でる人なきあわれを誘う

角本 静江

桜散りたちまち過去となる五月華麗の極み牡丹花咲く

川村 貴美

選者 酒向 一次

二人して山路迷ひし桜狩り訪ふすべのなき夢のしづく
や 谷河 ひさ

藤井さん解りましたよ「暗い絵」がブリューゲルの「死の
勝利」だと 土屋 道子

こもれ日にまだら模様の玉砂利は落葉散りしきつづれと見
まがふ 長島 宏

☆波打てる麦の畑のさわさわと浪のうねりの果てる果てま
で 三木 勝

ぼんやりと満たされぬ時が過ぎてゆく埋めることなし小さ
な日常 森 五貴雄

「お休み」とつくり笑顔に掌をふれば洗面鏡のわたしが笑
ふ 諸 幸子

学問もせて「就活」にとび回る慣らひをかきし国の行
末 山本 賀子

逝く春を惜しみ集いし老いの輪に春よゆくなと墨田の川
風 吉田 昌夫

☆廃屋の庭に咲き出す花なれば愛でる人なきあわれを誘
う 角本 静江

街路樹の白く咲きたるはなみずき春の大空いま暮れなづ
む 木村 重夫

選者 渡辺 幸子

樹の下に日本水仙ひそと咲き花びら透かす淡き春の陽

飯塚 裕子

山門の櫻わか葉の木もれ陽を今日の標のごとく踏みしむ

玉川 愛子

「人の知恵すばらしきもの」と変りゆく橋、道、ビルに老
母のつぶやき 長沼 温代

激動の三百年にたじろがず老松青々浜離宮を圧す

山本 賀子

次々と憂き事脳裏をめぐりたり一人草引く寒のもどり日

今井 芳枝

母となる娘を語る母のこと伝えおきたし親の思いを

角本 静江

悲しみは不意に來たれり一瞬の予感に震ふ真夜の電話よ

木村百合子

万感の嘆き悲しみ詠み給ひし友旅急ぎぬ亡き夫追ひて

小貴 昭

肌寒き飛驒の苗田に花散りて斑雪の如き筏なづさふ

酒向 一次

ポキポキと折畳傘開く時 雨に向ひて手足伸びゆく

庄司 久恵

頼る人逝きて八年早かれと樂しかりし日日心に残り
亡き夫と過ごせし家は土ありて肌に染みくる樹木の香
り
飯塚 裕子

早春のまだ淡雪の溶けやらぬ閑散とした新宿御苑を一人歩く作者。それは内視鏡検査の為上京し、医者から異常無しを告げられた安堵の心を抱きながらの散策であった。そしてその歩みは神田川から湯島天神に及ぶ。そこには心穏やかなしみじみとした時が流れ、東京の早春を満喫する。十八世紀江戸は世界で最も美しく清潔な大都市であった。その文化程度の高さは幕末に江戸を訪れた多くの外人を魅了した。しかし大震災と空襲は先人の遺産をことごとく喪失させ、東京は乾燥した大都市に変貌する。そんな中でこの界限はまだ少しは江戸情緒を残していると言えよう。だからこそ作者の感性は澄み渡り内省を促す。それが拔芳歌二首。夫と死別して八年。月日は足早やに過ぎ、思い出は浄化する。その思い出の中心に家がある。庭付きの樹々の香りのする家だった。今住んでいる家は庭の無いマンションであるがゆえに一入幸せだった夫との生活が思い起こされる。生れて死ぬる時の長さを瞬時に表出して重い。

傘並に花降りそそぐ百本の紅しだれゆれ原谷の丘

杉山 直子

原谷苑は京都原谷にある個人所有の四千坪の桜の苑。桜の開花時期しか開苑しない。苑の中には百本以上の紅しだれ桜があると言う。作者は春雨に濡れながら歩く。多くの人々が傘を並べて歩く。その傘の上に百本の紅しだれ桜の花が降りそそぐ。それは見事な花の円舞。作者の心の高揚が伝わって来る。しかし作者は上鴨神社の一本の紅しだれの大樹にも孤高の姿を見る。歌人の感性の豊かさを思う。

娘の法事無事に済みしと伝えありぬき春の陽背に受けて聞く
鶴来けい子

昨年八月号に「四十余年の幸」と題して娘の死を詠んだ七首が載った。「娘に逢ふもこれが最後と走りゆく名残の桜降り来る夜道」それは桜花の降りしきる頃。そして一年、作者は法事に参列する事は叶わなかった。残念であつたろう。しかしその気持ちを心に深く沈めて今従容として己が運命に従おうとしている。下旬の春の陽のぬくみはその思いを伝えて悲しい。

職退きし夫等それぞれ門前の掃除勤しむ朝の陽の中

長沼 温代

私と同年代の人達の建売住宅を購入し子育てを終えた団地の朝を想像する。マイホームパパを演じ、仕事大事でひたすら会社に通った男達が、退

前々号 (307 号) 秀歌拔芳

職してする事は門前の掃除。長く企業戦士として生きた同世代の男性の平均的姿なのであるうか。「それぞれ」「勤しむ」が何とも言えず悲しい。お互い顔を合わせながら、毎朝どんな気持ちで掃除に勤しんでいるのであろうか。

菜の花にレールの消えて海に落つ総の国なり妻と歩めり
松岡 三夫

その総の国に今私は住んでいる。菜の花は十二月から咲く。菜の花畑が海に傾りて行くその間に線路が走っている風景は拔芳歌の様にまるで一直線にレールが海に落ちて行く様な幻想に捕らわれる。美しい人間の錯覚。そんな幻想的な早春の房総を妻と歩いたと言う。あるいは作者は故郷しまたなみ海道の風景を思い描きながら郷愁にひたっていたのかもしれない。

地の上はしつとりとして静かなり時の過ぐるを素直に送る
宮井 富美

その時とは自然の見せる正しい移ろい。作者はその自然の正しい移ろいの時の流れの中で、あるがまま、素直に生きようとしている。その時の流れの量感を、「しつとりとして静かなり」と表現する。あらゆる地上の出来事も自然にすれぱしつとりとした静けさの中の出来事に過ぎない。作者はそれを素直に受け入れようと思い定めた。私がこ

んな気持ちに至る日は果たして来るのであろうか。蠟梅の枝ぶり良きをも刈り込みてさっぱりしたと夫言ひはなつ
村田 孝子

せっかく枝ぶりの良くなった蠟梅。作者はその枝ぶりを愛で楽しんでいたのに、唯切り詰めるだけの夫はその枝を刈り込んで意気揚々と作者に向かって「さっぱりした」と言う。風流を解せぬ夫へのいらだちを、結句「言ひはなつ」で見事に表現した。作者独特のユーモアを滲ませて心はもう許しているのであろう。

めぐり来る親の年金子が払う知るか知らぬか親子の絆
森 五貴雄

今、金加入者が減って来ていると言う。それだけ社会の互助精神が希薄になって来た。長い間置して来た年金行政の不正と歪みは老人に困窮をもたらし若者から希望と勤勉を奪った。拔芳歌の様な制度としての絆は親子の重荷にさえなつて来た。百歳以上の所在不明者が三百人を超える。七十歳以上ならどれ程の数字になるのだろう。人間が煙の様に消えてしまう現実を私達は受け入れさせられて行くのだろうか。絶対にあつてはならぬ。

母上は何時も家庭の原動力さあ朝飯よ空耳に聴く

相羽 照代
幾つになつても、否歳を取れば取る程母が恋し

くなるのは人間の原初の感覚と言えよう。母の胎内で人間となり、乳を飲み、長じては食事を作ってもらう。真実母は太陽である。ほとんどの人は「さあ朝飯よ」と言う母の声を聞いて育った。だから何かの拍子にふと思ひ出す。作者はそれを「空耳」と表現した。思ひ出す心の動きよりもっと切ない。

人間業終りにしても悔ひなしと言ひつつ葉で今日も調
整

浅見 時子

人間業を終りにしても悔ひがないと真に思える日が私に来るだろうかと最近特に思う。阿部先生が「死ぬのはちっとも恐くない」と私に話された年代に私が入って来たからだろうか。山月記の季微の様に人間の心と虎の心が交互に来、段々虎の時が長くなると言う悲しみが私にはある。結局死を恐れる自分に負けて私も葉を飲んでゐる。一日三十錠を飲む友達を知っている。医者は葉を飲まぬと聞いた事がある。医学の進歩と人間の幸福はイコールではない。作者の自虐に共感する。

再婚をしたれば詠まざる 死別には一万語ほど塩漬
てある

生稲 進

作者のやさしさが胸に沁みる。一万語ほどの塩漬の言葉は再婚をした新妻への思いやりであり、作者の決意である。再婚とはそう言うものなのだろう。それは塩漬してあるがゆえにいつまで

も腐らず作者の中に生き続ける。それに耐える覚悟こそが再婚者への真の愛。拔芳歌を読んで私は真実妻より先に死にたいと願った。

生命の安全守り生き甲斐を育む豊かな国でありたし

緒方 善丸

「国」とは何ぞや。「民主主義」とは何ぞや。「政府」とは、大きな政府、小さな政府、いったい私達は国に何を求めているのだろうか。グローバル化が進んで、地球と国家観が大きく変化して来た。あるいは今の政治の混沌は新しい国家観の揺籃期なのだろうか。しかしその原点は拔芳歌に尽きるのだと思う。あるいはもう国家は必要無い時代に進むのかもしれない。

娘らと妻登り下りのなだりなか笑みて染まりて芝桜色

奥田 清

そこは岐阜県明宝村國田家の芝桜の咲く傾り。その傾りを笑いながら娘等と妻が歩く、作者はその姿を見ながら、幸福感に浸っている。それは共に歩く母娘の幸せな姿に触発されては生まれる。だからこそ母娘の姿が芝桜色に染まって見える。美しい自然に囲まれて生きる喜びが生る喜びとなつて伝わって来る。いつまでもお元気でいてほしいと願っている。

母となる娘と語る母のこと伝えおきたし親の思いを

前々号 (307 号) 秀歌拔芳

角本 静江

母から娘へ語り継がれる大切な事。それが長く続いた日本の母の生き方の原点なのであろう。昨今日本の母たる六十代以降の女性の態度は目に余るものがある。拔芳歌の様に語り継ぐべき物を持っている母と娘の関係を今ほど必要としている時が無い様に思える。決して封建社会の母たれと言うのでは無い。少くとも肉親への愛情と他者への思いやりを語り継いでほしいと願うのは無理なのだろうか。

心臓の手術済みたりへからき命まうけたり」と兼好の語を借りる

川村 貴美

兼好の徒然草第五十三段に仁和寺の法師の話として酔って足鼎あしがなえをかぶって踊った男がその鼎を取る為に大怪我をして命だけは助かったと言う話が載っている。作者はその話を思い出し「危い命拾いをした」との思いと共有したのだ。心臓は命の根元。どれ程心細かったことか。それを、「兼好の語を借りる」と軽く表現したことが他者への気遣いとして心深い。

酒の海で独りを詠みて亡妻つまを詠む波間に漂う夏かもめわれ

君塚 一雄

「独ひとりの詩うた」と題する七首の掉尾を飾る歌。この七首の深い孤独感に私は圧倒された。一首として弛み

は無く七首全てが渾身の気迫に満ちている。共に暮らす人と死に別れ生き別れして独りで暮らす一年のどれ程長く感じた事であらうか。自問し、自答し、答えの無い問いに疲れ、独り酒を飲んだのたうちまわる。「孤独でも踏絵を踏まず生きるなり誇りは覚悟で生きてゆくなり」深く深く心に響いて来る。

再びを寝入らんとして枕と耳の一体となる鼓動聴きをり

木村恵美子

私もよく経験する。夜中に目覚め、再び寝ようとするのだが目が冴えてなかなか寝られない。だから耳を枕に着けて横になる。すると枕を通して自分の鼓動が大きくなって耳に響く。だからますます寝付けない。拔芳歌、一切自分の感情を表現する事なく唯「聴きをり」で止めた所に音に対する作者の感覚の鋭さを見る。

亡き夫は年々歳々離りゆく遺愛のつつじ今盛りなり

黒羽 紘子

夫が亡くなって十七年になると言う。その間夫の思い出も段々と風化して来る。人間の心理として決して非難されるべき事では無い。むしろ自然な心の有り様と言えよう。しかし作者にとってそれは悲しくせない事。命日が巡って来るたびに自己を苛む。遺愛のつつじが変らず咲き続けるからよけいその思いは強く切ない。

上野にて

玉川 愛子

久に來し梅雨のはれまの美術館つかのま浸るルネサンスの香
展示室の人群れの後ろにかいま見る「マグダラのマリヤ」語りかけくる
衣破れし娼婦マリヤの清し瞳が荒野より呼ぶ大いなる人
不忍池のベンチに低く民謡をうたふ老いあり孤愁をまとふ
餌もたぬ吾に寄りきて首かしぐ街に棲む鳩羽色くらし
なぜか目につくは古い人吾も同じ都会のよどみの底歩みゆく
上野駅にお国訛のこだま消へ人らふるさとを離りゆくなり

『ピエロの影』を読んで

杉山 直子

今年の夏の暑さは猛暑日の連続で、外に出てとは云えない
暑さの中、まず山頭火の世界に入り、又一茶のようなそして
良寛様の世界に触れ、又自分の境遇を重ね、楽しく刻を過し
ました。

全国大会のときお話をし、原田様の人柄に触れたような身
近に感じました。

私はむずかしい歌は分りません、身近に感じる歌が好きで
すね。ピエロのお化粧は涙が絵画にしている人も居て、悲しさ
と喜びとを表現して、影と題する所に原田様の追い求める物
があるのではないかと考えます。世の中いやな事件が多い中、
夢の中を旅をして、そしてむづかしい言葉に新しい道を私自
身探しているのです。

一首ずつ読んでいき、原田様の深い世界を少しずつ勉強し
ていきたいと考えています。

会員サロン

高校卓球部OB短歌会

北川 昭

奇特な事に三年前から定期的に卓球をする機会を持ち
その後倭万智に感化された会員から短歌を詠おうとの提
案があり、月一回の飲み会で歌会を始めて二年が経過し
ました。歌題詠と自由詠二首を私がメールで受付け無記
名で送信し、当日挙手で選歌して金銀銅賞を決めた後、
一首毎に各自が同窓のよしみと酒の勢いも加わって、忌
憚の無い感想・批評を浴びせた後、作者弁を聞きます。
会員には批評は批評に止まらず、修養のためどう変える
かの対案を出すよう求めています。

・春の日に蕾を飾る木瓜の店前出すをそと手助う

高頭揚一郎

・大寒に梅もほころぶ暖かさほろ酔い仰ぐ月までおぼ
ろ

猪瀬 幸夫

・休肝日判っているけどやめられず屁理屈つけて今日も
また飲む

澤田 孝志

・再会にグラスを交わすよろこびも知らない人の話す
る君

川島 祥二

・思い出は心の中のアルバムに二度と戻らぬ家族の写真

川村 英治

・これしきの卓球の球決まらぬか心で泣いて膝笑ってる

河野 元衛

作歌の目・作歌の技法(第六十八回)

作歌の技法(連歌編2)

三木 勝

連歌は、短歌や俳句と並べ較べるならば、最早、短歌や俳句のように大衆文芸としての位置を占めているとは言えない。連歌のゲームに参加してみたいという人々は、意外というのだが、その場と機会を見出すことは、今日の状況では、ほとんど不可能である。また、三十六歌仙などのように完成された連歌の伝統的な形式では、月の定座とか花の定座など、よむべき場所が指定されていて一定の法則がある。その法則に則って連歌というゲームをやるには、訓練が必要であり、いきなり行うには無理がある。よって今日、連歌を復興させ、普及していくには、このような法則にはとらわれずに、参会者一同、気楽に詠め、気楽に、連歌の共同性・即興性・遊戯性を楽しむことができる状況を作り出すことであろう。

このように参会者一同が気楽に連歌をよめるようにするためには、チームを作り、場を設定しなくてはならない。チームを必要とすること、ここに連歌と短歌・俳句との文芸形式の決定的な違いがある。短歌や俳句は、いついかなる場所においても独りでも創作活動はできる。しかし連歌は単独ではできない。必ず集団活動であるのだ。集団であることに連歌の強みがあり、趣味がある。

このことから考えて、集団の形成と場の確保は、連歌にお

ける作歌の技法の前提をなす条件である。良い連歌を作り出していくには、集団の形成と場の確保がなくてはならない。この点、平成二十年十月十六日、松戸市戸定が丘歴史公園の松雲亭で開かれた連歌の会は、画期的であった。

この連歌の会は、二十五名の参加者があり、三グループに分かれ、おのおのに三十六歌仙を巻いた。柏の読売文化センターからの参加者も三名ほどいたが、初対面の方々も含めて、時々笑いがあり、楽しい会であった。集団の中の個である事を楽しむことができ、一堂大満足のなか散会した。

現時点で連歌は、技巧云々よりも、集団の形成と場の確保が急務であろう。集団の形成と場の確保があつてはじめて、連歌の作歌の技法は、論じることができる。詠まれた連歌は、その良し悪しにかかわらず、公表され、供覧されることによって、現代の連歌のあり方を探っていくことができる。この意味において、連歌の技法を集団として、高めていく為には、歌誌等に掲載されることは、必要である。

連歌は集団で詠む事によって世界の多様性と多様性の力強さを、作者集団にも鑑賞をする第三者にも感受させる。ここには近代的西洋的な意味での統一性はない。しかし近代的な統一性がない故にかえって世界の多様性の美しさとその力強さを見せてくれる。連歌の技法で大切な事は、集団作成による作品を通して立ち上がってくる世界の多様性の美しさを多様性許容の視点でもって、連歌の世界を見る視点を、作り手も鑑賞者も自覚的に持つことであろう。

特集『ピエロの影』（原田寛著）書評

—原田寛歌集『ピエロの影』異説— 高崎 邦彦

私は「ピエロの影」序文に「影」は宗教と深く深く結び付くと書いた。私にはもう一点確信の無いままに彼の「影」に對して思う所がある。それは傾奇者（かぶきもの）としての「影」である。安土桃山時代の代表的傾奇者前田慶次郎を描いた「一蕪庵風流記」の中で作者隆慶一郎は「傾奇者」について次の様に述べる。『「かぶき者」はまた「傾奇者」「傾奇者」とも書く。最後の書き方が最も端的に言葉の内容を示しているように思われる。ほかに「傾く」という動詞や、「傾いた」という形容詞もある。つまりは異風の姿形を好み、異様な振舞いで人を驚ろかすのを愛することを「傾く」と云ったのである。』又「傾く」とは次の様に定義される。「世間の常識や権力、秩序への反発・反骨の表現」傾奇者とは戦国時代末期から江戸時代初期の社会風潮だと言う。しかし外面的に異風な姿形や、異様な振舞いは無くとも（当時の特に戦国大名などは傾奇者を好み受け入れる度量があった）現代人の心にも傾奇の心は存在する。帰属社会の異端である事が、どれ程苦しく住み辛いかは、小中学校でのいじめの実態が如実

に物語っており、それは大人社会の模倣である事も指摘されている所である。

私は序文の中で「彼の持つ純粹さと、権力に迎合せず、權威におもねないその生き方に歌人としての大きな可能性を見た。」と書いた。阿部先生が彼を愛し信頼したのも、その一点であつたろう。教師として彼の生徒に接する姿は純粹であり、真面目であつた。それは行動や言動が生徒の立場に立つと言う事であり、当然ながら組織からは容易に受け入れられない。私学であり、転勤も無い澁んだ集団はボスを中心とした共同体に安住しようとする。そしてボスはおのれの力を誇示する為に常に誰かを標的にする。そんな組織の中で苦しみ続けた彼の自己防衛の手段が「影」の創造であつた。

先に「傾く」とは「世間の常識や権力・秩序への反発・反骨の表現」であると書いた。まさしく、職場での彼の内面は経営者や教師集団への反発と反骨に満ちていた。だからこそ、彼の詠む「影」には激しい怒りがある。しかし、彼は決してその怒りを怒りとして言葉にしようとはしない。よく「原田さんの短歌は分かり辛い」と言う声を耳にする。それは彼が悲しみや笑いの中に二重、三重にその怒り、反骨を紛れ込ませているからに外ならない。短歌と言う表現媒体の持つ豊かな言語世界は、彼の生き抜く大きな力となった。だからこそ彼には口語短歌なのだ。

退職して自由人になった彼に、今まで以上に自由に言語世界の影を傾かせてもらいたい。職業人としての無意識の抑制

を解き放った彼の「傾奇者」としての「影」をこれからも楽しみに読んで行きたい。

歌集『ピエロの影』への視点 三木 勝

短歌を詠むことは、心を旅することである。心の旅で見た事を歌にする。歌は見た事を、言葉を使って表現する。見た事を言葉で表現できるとき、それは具象的となる。具象的ということとは、見た事をさす名詞が、存在していると言う事である。見た物に対する言葉があるということは、既存の世界観、既存の価値観で対応できるということである。心の旅で見た事に対して既存の世界観、既存の価値観で対応できなくなる時、作者は言葉を持たず、表現する言葉を持たない。表現する言葉を持たなくなったとき、歌は抽象化する。抽象化によって、見た事を伝えようとする。

原田寛の歌集『ピエロの影』の歌はそのような歌であり、歌集『ピエロの影』は、そのような歌の歌集なのである。

- ・感情を抑えることに馴れてきて酒の飲み方少し変わった感情を抑えることに馴れることによって、作者はここから、新たな心の旅を始める。

- ・夜の闇夜の昏睡夜の庭夜の昆虫夜鷹の涙

夜鷹とは夏の夜鳴く小鳥であるが、娼婦の意味もある。

「夜鷹の涙」とは娼婦の涙でもある。また宮沢賢治の『よだ

かの星』のよだかが最後に流した涙を連想させる。賢治の作品におけるよだかの涙には、祈りの意味があり、この歌はその祈りと連動していると言える。

- ・かくれんば皆でいじめる鬼ごっこ後ろの正面だあーれもない

いじめとは、誰も責任を取らない卑劣な行為のことである。責任を追及されると、蜘蛛の子を散らしたように、誰もいなくなる。これは、いじめ社会・日本の構図である。

- ・知らぬ間に自分の意志と関わらぬ晒されている意志ならぬ意志

人の意志は自分のものでありながらも、自分のものではない。自分の意志を超える力が、人の意志に働きかける。

- ・まだ少し仕残したことありそうな屈折しない言葉を探す抽象は、具象への出口を絶えず求める。抽象は具象化する事によって、その思念を存在へと転嫁する事ができる。

- ・沼がある沼の在処を確かめる深さを測る思考の水草

ここでの水草は、思考の道具・手段を象徴していると言えるであろう。思考の道具・手段は、科学や技術の方法を使うが、短歌もその「思考の水草」のひとつである。

作者は、短歌という「水草」を使って、心の旅をした。そ

してそれを歌集にまとめた。短歌はその瞬間瞬間を読むが、歌集になると瞬間瞬間の世界が連続して、継続するひとつの世界が示されてくる。作者は、この世界を踏まえて、次の世界へ踏み出す重圧に耐えているのだろう。

原点に故郷あれば

石塚 立子

私は作者の文語短歌の時代を知らない。初めての出逢いは、「太陽の舟」が「ナイル」となった平成十年「ナイル全国大会」の折、阿部先生とバスの前列に座り、缶ビール片手の楽しげに語らう作者であり、原田短歌との出あいには、平成十一年、「ナイル」から「太陽の舟」に戻った九月号の二十五首詠「ピエロのうた」であった。当時、短歌を始めて間のない私には、衝撃の歌群であり、難解この上もなかった記憶がある。そして、今でも原田短歌が難解である事実は変わらない。

『ピエロの影』は、あの折りの印象そのままに作者の内面までも容赦なくさらす。

・幾度も崩れてしまう自の裡の粗壁今日も塗ってる

(垂直の影)

・触角を頼りに闇を這って生き昏い意識が神経を研ぐ

(習癖)

私は、歌集の中でこの二首がより心に響き、好きである。言葉の選択も魅力であるが、それ以上に、人間の心の裡に持つ、脆さや哀しさがより伝わり、裡に隠す負の世界、ちっぽ

けな素迄もが、心の共通項の様な思いがするからと思う。

・麦踏みに段畑登る父と母東風吹く中に春来るを見る

作者の「あとがき」によると、この故郷の景色が、この地に住むご両親が歌の原点という。歌集『ピエロの影』は、原田ワールドのプロローグと思う。是非、第二、第三の影が歌集となる日をお待ちします。

脳の構造

川村 貴美

三十年という長い歌歴を持つ作者がこの程へピエロの影へを上梓。今夏の酷暑は耐え難いものでしたが立秋ともなり、漸く御書を開きました。一度読み、二度目味わい、三度頁を繰りました。読み進む度に考え込まれる歌群、どの短歌も私のこれまでの作歌表現からは遠い、脳の構造がまるで違うように思われたのです。

短歌といえば花鳥風月なのですが、花は菜の花、柘榴、月下美人、紫陽花、残花、鳥は海鳥、雀、燕、鴉、仏法僧だけでした。その代り他の生物、蟻、蟬、蛙、犬、猫、金魚、蝶、蠅、蛾、守宮、蜻蛉等、日常親しい身近なもの達が詠まれていました。

・十年が長いと思わなくなってきた中秋の今日吾の誕生日
・懸命に納得しようと思えてるその感情が走りて吃る
・幾度も崩れてしまう自の裡の粗壁今日も塗ってる
・掌の大きさ比べを寄せ合った荒れた過去もつ女の履歴書

・足許の捨て猫見ない振りをした露地の冷たさ冬日の屈辱

・新婚の女が帰宅の準備する料理の本を小脇に挟み

・たちまちにふたつの定理合体し動かぬ思想古い饒舌

・秋蒔いた菜の花の芽が尖ってる霜の朝に小さな光

・この街で生きねばならぬ 日没の匂いの残る季節のおわり

・わずかだけ熟した柘榴晩秋の完熟色の夕陽を拒む

好きな十首を書いて見ました。どううたも結句が冴えています。

併し、P 146の尖端排除と結合螺旋の行程 というような語はボエムの世界を揺るがすもの、氏の修めた建築学から産み出された語なのでしょう。とても解らないと匙を投げればP 146知らぬ間に曳きずっているこだわりの荷物を下ろし迷路の裏側 といった一首に共感しホッとしました。が又もやへ假想の假想」に辿り着くとその感覚表現の自由さに舌を捲きます。折々の感情をへ心の歪み」として見詰め、生の一瞬々々をへ時の溝」と捉えて、自己の内面のデリケートな表現にとことん挑んだ作者、時に心の漂いを碎き、分解し、蘇生を念う〈影〉。正に宗教者の姿と思いました。

変転極まりないこの世に生を享け、満足のゆく生き方など望むべくもないのですが、今日まで八十余年も生きて来た自分の来し方が顧みられ、主題となっている〈ピエロの影〉の一冊にはわかり切れない乍ら、魅かれる何かを感じ、終頁を閉じました。今後のご健詠を祈ります。

これまでと変りなく

久保田昭江

原田先生よりご立派な歌集を頂いたのは、六月の大会以前でした。本部歌会にも休みがちな私は、歌集ご出版の話など全く知らず本当に驚いてしまいました。お目出度うございます。

ご立派な装丁は言うまでもなく、高嶋代表の序文に始まり、私の存じ上げないこれ迄の生活の姿勢が偲ばれ、本当に感動致しております。立派な教育業界に有りながら、僧籍に身を置くことも存じ上げております。

私の入会間もない頃に、吉田操さまが「生前葬」を開かれました。その時に原田先生より細ごまお話をして下さいましたのを覚えております。勿論阿部先生もご健在であられました。多くの方を送り、そして多くの方を迎えて、今も「太陽の舟」は健やかに進んでおります。月々の歌会も休みなく盛会を続けます。司会を受け持つ原田先生の名司会振りには会員すべて感動し、ゆだねております。今後其々心の優しさを持ち、誰とも公平に接する人柄は変らずにご指導下さいますようお願い申し上げます。私の好きな歌のほんの一部です。

・耳鳴りのなかのたとえば波の音夏が寄りくる故郷の音
・山積の放置されて朽ちてゆく廃車同志が闇に軋めく
・十年が長いと思わなくなってきた中秋の今日吾が誕生日
・立止まり振り返ることの出来る過去夢に消えゆく火花なつかし

「ピエロの影」評

小貫 昭

原田寛氏が短歌集「ピエロの影」を上梓た。一読して感じられたのは、氏の個性豊かな反骨の気力と同時に、随所に潜む心やさしさである。

まず書名が面白い。「ピエロ」と聞くと思い浮かべるのが、だぶだぶのズボンと胴着、白塗りのメーカーキップ姿、それがおどけて舞台の上を巡る。しかしその派手で陽気な動きの陰に、正直で純粹、寂しげなピエロの実体があり、それが観衆の心をとらえ、彼らは共鳴する。

原田氏のこのたびの歌集は、世の中のもろもろの事象をあたかもピエロの挙動のごとくに重ね合わせ、その影の動きの部分に本質ありとの真情で詠まれているのではあるまいか。事象を皮相的に見て判断するのではなく、その影の部分にこだわりの、氏の独特の目線で凝視されているように思える。

正直申して、氏の詠法は難渋であり、私の読解力では短歌の真意をどこまで理解できたかは疑わしい。しかし噛み締めると滲み出る味わいがそこにあった。美辞麗句をちりばめた文語短歌がややもすると幅を利かす短歌界にあって、氏はあえて口語短歌の茨の道を選び、目下、その途上にある。

このたびの歌集「ピエロの影」は、原田氏のたくましい歩みを指し示す道標であり、私はこの歌集から多くを学びたいと願っている。

・はっきりと見えないモノに近付かず少し離れて道理に従う

(本書中の「ピエロのうた」の項より)

歌集「ピエロの影」出版を祝して 志賀 倭子

現在の太陽の舟の会員の中で私は著者、原田寛さんとの付き合い合いは最も古い方に属する。岸田先生、石井さんと亡くなられた後歌会の折、原田さんは阿部先生の隣りの席で何時も屈託のない笑顔で司会の手腕を発揮していらした。

総じて短歌結社も人生も決して平坦なものではない。

最初「ピエロの影」と言う歌集名を見た瞬間は、内容と著者と結び付かなかったが、歌集の高崎先生の巻頭文を読ませて頂き、仄聞はしていたが、原田さんが職場で謂れない所謂「いじめ」に耐えていらした時期を、在家僧侶としての信仰心と権力や権威に徒に追随しない、純粹な精神力で乗り越えていらした経緯を知った。

高崎先生は原田さんを影を追う歌人と位置付けられる。歌集の中の「影」を詠んだ歌は五十一首に及ぶ。「影」を作る「光」の歌は十首あるが中の一首は「光」である。対比する言葉として多く使われているのは「聞」と「白」。

原田さんは「蟻」と仲良しだ。蟻のみならず猫、蜘蛛、蚯蚓、蛾と魚と生命あるものに親近感を持っている。

元々、原田さんは大学で「建築」を履修され「短歌」の道に入られた。理系と文系、一見相反する分野の様に思われるが、原田さんは難なく融合させている。

歌集の中の私の好きな歌を揚げればきりがなが、
・折り紙の欺し舟に乗って支配の外に抜けて迂回す

・足許の捨て猫見ない振りをした露地の冷たさ冬日の屈辱

・幼らがつくって並べた泥人形地蔵のそばに形を保つ

・とにかくもあらゆるモノが変なのだ確かな現実「理不尽」
の文字

・何時からか拒否されることに馴れてきた遠い耳鳴り過去の
囁き

原田さんの繊細且つ純粹な重層構造建築の様な人格とこの
歌集をよく表現した一首を引けば次の一首であろうか。

・斥力と引力とが調和する時計の振子の尖端の影

原田さんがこれからの人生の口語短歌の先駆者の門口に立
たれた記念の品である。又、昔日の穏やかな笑顔で、太陽の
舟短歌会の会員を指導して頂きた度いと願っている。

歌集『ピエロの影』は英知の輝き 庄司 久恵

原田寛氏の第一歌集「ピエロの影」は手にずしりと重く
装丁も品格があり、題字の表情、黒い掠れ、朱色の小さなピ
エロの挿絵は泣いているのでしょうか。

二十数年間の原田氏の短歌は魅力的で難解でしたが、解け
てくると、きめ細かな心の屈折が読み込まれていて、感情を
越えた心の動きがあり、精神の輝きがあり、詩情もあり私の

好きな歌でした。この歌集はそのような原田氏らしい歌の集
大成の歌集だと云える。

・舌までも渴いてしまった 意味もたぬ争いに生きたホモサ
ピエンス

・白地図に描かれた夢は幻影の鐘の裏側凍る反攻

・古里の聲であつた夜廻りが己の闇に拍子木を打つ

上句と下句が一見無関係のように見えながら一首としての
姿に不思議な統一感がある作品が多い。抽象から具象へ。具
象から抽象へと展開する歌の形が原田氏のひとつの形式とし
て出来上がっている。

・穴があるいつも風が抜けてゆく振り向くことないかなしい
自問

・正確な歩幅で歩む蟻の列宙の規則に釣合っている

原田氏は在家僧侶であり、仏教の求道者である。思いがけ
ぬ大きな苦悩に出逢い、その現実を見詰め、苦しみ、強い意
志と英知で乗り越える時、どんな時も悲しみを隠して他人を
笑わせるピエロの幻影を見つけ、その中に身を置き問い続け
て自己の内部を強め魂を深めて、鋭く詩情のある歌集となり
ました。心から賞賛いたします。

心の筏——「ピエロの影」を読んで 末次 房江

あくまで自己の内面にむけられた真剣な凝視の歌の群れ。
深い思索にみちて心を打たれ、自分の在りようが反省させら

れました。

- ・ 幾度も崩れてしまう自の裡の粗壁今日も塗ってる
- ・ あいまいに今日も明日も演出す未練を含む透明な微笑
幾度も崩れてしまう自信を何とか立て直し、立て直しして
生きている自分とも重なり同感しました。自信・確信はなく
ても今日も明日も生きて行かなくてはならない。それも微笑
をもって。自分の裡に何かをかかえていようと、人をなぐ
さめ喜ばせねばならぬ。ピエロの裡なる心かも知れません。
- ・ 永遠のブランコに乗り無の底の墓標に連なる陽に透ける道
無の底とは何かなど理屈で分らないことはさておき、美
しく恐ろしい死後の世界のような光景が見えてくる歌。
- ・ ボールなど追わずになった老犬の体温通う近さに屈む
何というやさしさでしょう。作者のかざらない自然な姿が
あらわれています。とても作者らしい歌だと思います。
- ・ 古里の聲であった夜廻りが己の闇に拍子木を打つ
闇の中に拍子木を打つとき聲の夜廻りには、生きている手
ごたえがあったのでしょうか。心打たれる歌です。
- ・ 親鸞も生きることの矛盾に苦しみつつ生き抜いたときさま
す。作者の心の筏に発酵しているものがたのしみです。

最初は戸惑う

月田 藤江

最初難しい歌の羅列かと戸惑っていましたが、幾度か読ま
せて頂くうちに何と滋味深い歌の多いことかと感動させられ

ました。人間のほんとうの苦しみ、哀しみ、優しさ等々が深
く読み込まれていてふつつつと原田さんのお人柄が偲ばれる
おもしろい。常には何とさりげなく明るく司会は名調子に本
部歌会を進めて下さり、会員に希望と安心を与えて下さって
おられます。毎回の司会の折には常に平等に批評を指名なさ
り、気の休まることなく尚時間内に納め、充実した歌会に納
める神技に、御自分の勉強になっておられるか等と考えたり
もしました。“太陽の舟の宝物”と高崎先生の序文のなかにも
みられ私も真実そう思います。今日此の様に素晴らしい「ピ
エロの影」の歌集を出版なされ心より御祝い申し上げます。
此れよりどうぞ御健在で太陽の舟の重鎮として、高崎先生の
永久なる右腕でおられますことを切望いたします。

- 私も此の様な良い会に席を置かせて頂きますことを一世の
誇りと思っております。私の心打つ歌、何首も書けず残念。
- ・ 白い独楽ひとつの石をころがした独りの遊びの重い夕暮れ
 - ・ 重力に耐へ切れずして躓いた浮かびて沈む不信の飽和
 - ・ 子供達がビニールプールを去った後小さな雲が水面に遊ぶ
 - ・ 幼な友逝ったとの報校庭に円を描いて石蹴りをする
 - ・ 失ったものを指折る生のなか流れくるもの流れゆくもの
 - ・ 意味のない言葉ひとつで全体を侵蝕していく孤独の狂気
 - ・ 閉ざされた臉の向こう流されぬ涙が暗く無心の孤独

心の深い歌集『ピエロの影』

土屋 道子

原田先生、歌集『ピエロの影』の御上梓おめでとうございます。素晴らしい御本が出来ましたね。

原田さんには入会以来本当にお世話になりました。歌会用の詠草のプリントはずっと原田さんが製作していらっしやいました。その後三浦さん、そして私と移って来たのでした。歌会のこと、大会のこと、原田さんと一緒のお仕事はとても楽しいうございました。新宿のカルチャーセンターで知り合い、この「太陽の舟」を紹介して下さった藤井さんは、原田さんの大ファンだったのです。「土屋さん、原田さんを捕らないでね」が口癖でした。藤井さんはその後、山梨の老人ホームに入られ山を眺めて泣いている等の手紙が来たりしました。「太陽の舟」のお友達何人かで見舞に行ったこともございました。

「おうむ真理教」のことで騒ぎはじめた頃のことです。「原田さんが「おうむ」へ入ってしまったのよ」と泣いているのです。私は「そんなことは有りませんよ、二・三日前に原田さんにお会いしたのですから」と慰めました。ところが、二・三日経つと又同じ電話がかかるのです。私は又同じことを言い乍らこちらまで泣けてきました。四・五回そんな電話の後、山梨の病院に入り、亡くなられたとお知らせを受けました。私は泣きながら、原田さんはお幸せな方と思いました。

藤井さん、原田さんの素敵な歌と一緒に読みましょう。

・十年が長いと思わなくなってきた中秋の今日吾の誕生日
藤井さんが逝かれて十年余り経ちましたね。

・予測せぬやさしい昔の風景が記憶を戻し疎外されゆく
昔見たであろう風景が戻ったような気がするが結局一瞬の
事なのですね。

・知らぬ間に赤信号を歩いている意識の内の意識が切れた
何がしてはいけない事なのか、ちゃんと解っている筈なのに
人間はたまにそれをしてしまうのですね。

・かくれんぼ鬼のままでは帰れない「夕やけ小焼」で答えが
沈む

「夕焼け小焼」の音楽で家へ帰る時間を教えてくれる。併し「鬼のままでは帰れない」その子供の心が偲ばれる。

歌集『ピエロの影』を祝して 照山 好子

原田先生退職を機に、歌集『ピエロの影』を上梓され読ませて頂いた。

歌の視点をいくつかに分けて挙げてみた。故郷は愛媛県
田舎を聞いている。詠まれた歌は二首あった。色、風、音で
表現し、故郷を懐かしむ気持が深く伝わってくる。

・川面にスレスレ飛んでる燕はふるさとの色ふるさとの風
・耳鳴りのなかのたとえば波の音夏が寄ってくる故郷の音

素朴なものへの優しい眼差し

・秋蒔いた菜の花の芽が尖ってる霜の朝に小さな光

・子供たちがビニールプールを去った後小さな雲が水面に遊ぶ

・何気なく前肢つっぱり背伸びする木陰に遊ぶ学校の猫

高崎代表の序文に「職場における人間関係で苦しい時期があった」とある。その頃の歌かと読んだ。言葉の感覚的表現が巧みだ。

・白い独楽ひとつの石を転がした独り遊びの重い夕暮

・憂き事をもちて残花の下をゆく俯いてゆく心の平衡

・かくれんぼ皆でいじめる鬼ごっこうしろの正面だあーれもない

「白い」とは何を指すのだろうか。大切なもの。誰にも汚されたくないもの。己の意志。いずれのものでもあるように思えた。

・白い闇消せない過去が手足付け敗れた曆貼り合わせてる

・色あせた影のなから逃げる影透けることない白い回想

・執拗な奇妙な畏に足取られ誰にもわからぬ白い追憶

世間の喧騒から逃れ、自分だけの空間に立っているようなそんな錯覚にとらわれる。

・風船がひとつ浮いてる束の間の安らぎがある図書館の窓

・乗り越した見知らぬ町のバス停で他人となった小さな時間

・忘れ物一つあるようなそんな日に古本屋に寄り文庫を買った

七月の歌会后、暑氣払いを兼ね『ピエロの影』の出版祝賀会を行なった。原田先生に今の心境は、と伺ったところ「脳

がどんどん若返っていくような気がする。忙しいんだけど、忙しくない。すごく嬉しい」。まるで嬉しさが伝わってくるようだ。今後の活躍をすごく楽しみにしている。

『ピエロの影』に寄せて

富原 澄枝

原田先生の第一歌集『ピエロの影』のそれぞれの作品一首一首に深い意味が作者自身の人生が刻まれているのだと強く感じました。それらは、単純な生易しいものではない、作者自身が味わった他者には計り知る事の出来ない辛酸そのものだったのだと思います。それだからこそ、高崎先生がおっしゃる様に、作者独特の口語短歌が生まれたのだと思います。

作者でしか詠む事の出来ない原田ワールドなのです。そして、読み進んで行く内に、高崎先生が序文で述べられている様に私も「影」を感じたのです。「あれ、これってー影」「ああ、そう言えば、この歌集の題は『ピエロの影』であったのだ」と…。

きっと、作者はこの歌集を出版する事によってすべてとは言えないまでも、様々な葛藤、戦いを整理する事が出来たのではないのでしょうか。心身共に軽くなり、より一層深い豊かな心の持主となり、病む人々の支えとなり、折り返しの人生を歩んで行かれるのだと思います。

原田先輩の歌について

二反田 實

つい今しがた、中原中也が一九三一年九月二十二日に書いたのではないか、という未完詩に、

「支那といふのは、吊鐘の中に這入ってゐる蛇のやうなもの。日本といふのは、竹馬に乗った漢文句調、いや、舌ッ足らずの英国さ」（文芸春秋・八月号・二七九頁より）

と書かれてある、と知りました。

二千年になりなるとする日本文化史の「悲しい現実、〇〇かぶれ」は、中也の言葉の中に全て含まれているように思われます。

しかし「和歌の道」だけは……と思いたいと思うとき、ふと原田先輩の歌が「風の香」のように、いや風そのもののようには思い出されず。その理由はよくわかりませんが、多分「阿部先生」のまわりを、先輩は「風」のようにぐるぐると少しの酒をたよりにまわりまわっているのではないでしょうか。そしてその歌をよくよく解剖してみれば、その中から必ず「阿部先生」という魂が出て来るように思われてなりません。表現は違っていても又、文学的ではない表現も、多分「阿部先生」は、今も愛しつづけられているように思われてなりません。二〇一〇年八月記。

原田寛の署名

松本 啓子

阿部先生に愛され、高崎代表と共に「太陽の舟」の中心的存在である原田氏が第一歌集を出版された。私は夏の大会に欠席したので『ピエロの影』は七月始め、本部歌会の折、手渡しで頂いた。早速開いた扉に毛筆の原田寛の署名があり胸を打たれた。堂々と書かれた名前の寛の字の几のところ、人がひざまずき最後に撥ね上げんとする筆勢が今の原田氏らしく自由で伸びやか「之からやりますよ」との決意が見られ感激した。

高崎先生の序文を再三拝読し、これ程迄に人生の出会いに恵まれた原田氏に乾杯、何よりうれしい。三十年の職場での苦難をのり越えられたのは、師友の巡り合せと、「短歌」に外ならないと恐れ乍ら思う。

今年3月号に書かれた高崎代表の原田短歌の批評はすばらしい。原田短歌は読手次第であるとおづくと思う。私のような目先の事実しか歌にできないものは、唯むつかしいと思ひ込んでいたが、三十年近く共に歩み乍ら、まだまだ未熟な自分が恥ずかしい。

本部歌会では一人一人の歌を理解され、やさしくユーモアを交えて包容して下さる名司会者である原田さん。

之からは原田短歌の深みを読みこめるよう少しづつ勉めてゆきたいのでよろしくお導き下さい。

・夜が明け光り溢れる坂の上風が生れる風がころがる 寛

七十の影

丸山孝一郎

原田同人の歌集『ピエロの影』、著者の豊かな感性に彩られた個性ある歌の数々、だが私には難しい歌の数々であった。しかし著者が「影」という微妙な言葉を歌集の題名に選んだことに関心をもち、影と言う字を数えてみた。歌集(三百八十余首)の中で七十字もあった、

影は様々な分野に、比喩的にも、また多様な概念で使われていることは衆知のことである。これは物体が光を遮る結果背後にできる影が床や壁の形状によって、様々な歪んだ像が出来ることなどに神秘の世界を感じたからではないだろうか。歌集には、垂直、直線、螺旋などの幾何学的な言葉が使われているが、これらも用いて自己や自然界の歪んだ姿、さらに屈折した心のなかの影を歌にしている。

影は光があるから出来るのだが、その光の対極に闇、夜がある。著者は影をとおして心の中に渦巻く夜(三十九字)や闇(二十五字)の世界を歌にし、さらに夜の手前の夕暮、暗(十六字)、夜から連想される沈黙(十二字)死(十一字)無(二十一字)などについても著者の歌歴からくる鋭い歌を読んでいる。また夢(十九字)の中に闇を見、闇のなかで影を追っている。

影は夜の夢のなかで見る暗いイメージの世界だともいう。

「横になる直ぐに睡魔におそわれた ピエロの歌が影法師を追う」著者は愛と欲のはざままで怒りと悲しみを胸に秘めな

がらも、舞台上で陽気に歌い踊るピエロに己を重ね人生の影をみたのであろうか。

歌集『ピエロの影』に寄せて

村田 孝子

原田先生『ピエロの影』の上梓に寄せて一言記します。毎月支部歌会 of 原稿の中に私にはとても難しい深い心象歌の先生の歌が直ぐわかります。表紙のピエロの影の文字は、支部の忘年会や暑氣払いの席での、先生が目を細めて嬉しそうに酒を召し上がっている時の何とも言えない雰囲気と重なり、不思議な影の歌集の暖かさを感じました。なつかしい風景の中にも何かを問われている気がしました。

- ・晩秋は軒の先から昏れてゆく西陽の光を陰が切りゆく
- ・せせらぎよせせらぎ川よ冷えてゆく半陰影のひとつの無言
- ・ぬめぬめと堕ち込んでゆくザリガニの触覚の眼に見つめられて

・いくつもの苦しい母音聴き取った夜の樹液が沈静してゆく

ゴーストを住まわせて

おられる原田先生

山名 恒子

原田先生の歌の多くは解らない! と思っていました。今もそうです。でも何故か知らん振りをして通り過ぎることがで

きない、何かを感じます。それが何なのか判ればとても落ち着けるのですが、何かはまだ正体不明です。

読んで感じる不安や寂しさ、繊細さや危うさ、ふてくされきれない優しさや悲しみを、わたしの母性本能がキャッチして見過ごせないのかと思っても、少し違うようです。

人間本来の性、良くも悪しくもこの世に持って生まれ出たさまざまな性を、いとおしくも思い哀しくも思い、ことあるごとに思考がそこに行く、そこで悩み悲しみ喜ぶ心を、もう一つの心が本当にそうなのか、と凝っとみつめている・・・そんなふうにも感じられるのです。

歌集『ピエロの影』を読んでいて、最初に感じていた解らない！という気持ちだが、終りに近づくにつれ次第に変わって来ました。これは驚きでした。わたしが先生の歌に馴染んできたのか、歌が変化してきているのか、原田先生の上に何があったのか、活字になった歌が凡てと思えば、これほどの歌が作れるならば苦惱結構中傷結構ではありませんか、と申し上げたい気持ちでいっぱいです。もう一度読み返すと、もつと何か判りそうな気がしています。

・沈黙もことばのひとつ偽りと猜疑を捜し小石をけった

『ピエロの影』の巻頭歌

吉田 昌夫

原田寛同人の第一歌集『ピエロの影』を頂いた。早速ページを捲る。

水槽の魚が死んで浮いている今夜はぬるい少し歩こう

巻頭歌である。口語短歌であることは分かるが、意味不明である。水葬の魚が死んで浮いているのを見て、温かい夜である、少し散歩しよう、というのである。巻頭歌は、その歌集を象徴する一首であると思うが、果たして何を主張するのか。ふと思い中也の詩集を繰ってみる棘あるメモの葉が落ちたそうなのか。「山羊の歌」の中原中也なのだ気付く。ランボー・ヴェルレールの影響を受けて生の倦怠を歌った中也。棘のあるメモが積み重なって鋭い歌の世界。

歩をゆるめ初夏の香りに身を包み己れの姿を影となしゆく
第三首目にして、この歌人のキイワード「影」が登場する。そうなんだ、原田寛はここから「己の姿」を影とみて歌を詠んでゆくのだ。スタートは初夏なのだ。決して真夏でも真冬でもない。勿論、秋でも春でもない。己をピエロと見立てたのは初夏の香りに身を包んだ己なのだ。分かる気がする。

意識せずたまに逆流する意識風に転がる石の存在

第四首目にして歌人原田寛のメインテーマである意識が詠まれる。意識しない意識が読み込まれる。原田寛は大学で建築を学ぶ。建築は設計し構築する。意識の構築といってよい。そして原田寛は僧職にも身を置く。工学と仏教学の狭間に芸術を構築しようとしたのである。それで歌道をえらんだ。

巻頭四首は「過去を聴く」というタイトルで纏められている。この過去から未来に向かって今なお歩き続ける歌人原田寛である。

『ピエロの影』を読む

松岡 三夫

人は何故短歌を詠むのだろうか。俳句を作り、詩を書くのだろうか。それはおそらく自己の存在証明をするためであろう。歌人原田寛は口語短歌によって自己の存在を証明してみた。

『ピエロの影』の歌人は自らをピエロと規定し、その存在を影であると証明した。

夢の中で吾を嘲るピエロに会った新宿の街俯いて往く
横になる直ぐ睡魔におそわれた ピエロの歌が影法師追う
新宿の街で出会ったピエロも、影法師を追う歌を歌うピエロも歌人原田寛自身なのである。歌人ピエロははっきり見えないモノには近付かず少し離れて道理に従うのである。そして

繰り言をきれいにまとめて言い訳す仮面の教師死者の皮剥く

と自らも長く教師を勤めた歌人は仮面教師の面の皮を容赦なく剥がすのである。また突然

この街で生きねばならぬ 日没の匂いの残る季節のおわり
と分かりすぎるほど分かる平凡とも言える歌が顔をだす。
なんとも不可思議なこのちぐはぐさ。そして難解な「垂直の影」のテーマである。

一本の線が支点を指し示す転位できない垂直の影
なるほど垂直の影は転位できまい。そもそも垂直の影とは

何か。垂直線に影はできるにしても、いや、垂直線にも影はあるまい。垂直は非存在の存在である。非存在に転位できるもできないものではないのか。しかし、歌人は一本の線が支点を示すと見ているから、この垂直は影を有する存在である。

『ピエロの影』の三百八十余の歌に登場してくる七十字の「影」はやはり非存在の存在なのである。影は光が照射して初めてできる。「水の影」であり「時の影」であり「夏の影」であり「逆光の影」である。

そしてその向こうに闇がある。

山積みに放置されていて朽ちてゆく廃車同志が闇に軋めく

う
こだわりが希薄なった 肉付きの面が闇から吾を窺

とまことに不気味な闇が黒々と覗く。

ピエロとは、道化役者、または道化者。歌人原田寛を知る者は、彼を道化者と見ることはまずあるまい。実際にも比喩的にも。その彼が自らをピエロと呼ぶところがピエロ的なのである。悲しき道化者なのである。

歌人原田寛が、このあとどのように「ピエロの影」を脱出してゆくのか、止まるのか、じっと見守ってきたい。それがわが長くもない余生の楽しみのひとつである。ひょっとしたら、ドラスチックな変革がこの歌人におこるのかも知れない。

歌会報告

渋谷支部 支部長／志賀 倭子

日時 7月3日 10時～12時

場所 きゅりあん（品川区立総合区民会館）

出席 6名 出詠 6首

司会 丸山孝一郎

先月と同じ6名の歌会になりました。

・近隣の古き豪邸毀たれて視界開かれ見慣れぬ景色

変わり行く都会の様子が話題になりました。 志賀 倭子

今月の七首詠鑑賞は武田さん、志賀さんの七月号七首につ

いて行いました。

水戸支部 支部長／長須 正文 （塩田記）

日時 7月4日（日） 13時～15時

場所 みと文化交流プラザ

出席 7名 出詠 11首

司会 塩田 秋子

第2日曜は選挙のため、第1日曜となった。ミニ講義は尾

上柴舟。学者と同時に歌人。美しい歌が多い。歌会に入り、

先生はじめ皆であれこれ言い合いながら鑑賞と添削。

・田の畦に刈られし草の匂ふ午後なぜか脳裡に父母の顔つ

品川支部 支部長／久保田昭江 福地 啓子

日時 7月15日（木） 13時～16時 （久保田記）

場所 旗の台シルバーセンター

出席 7名 出詠 13首

司会 久保田昭江

月に一度の支部会を、会員それぞれが大事に思い、集まっ

てくれた。貴重な時間なので無駄のないよう相談や、連絡事

項など済ませ、後、歌会となる。

・手作りの赤飯給ふ隣人に東京砂漠の潤ひとみる

手づくりの赤飯を通じての対人関係が見えて美しいと評 吉岡悠紀子

・竹林のゆさゆさ揺るる丘陵を展き建てられし老い等の館 月田 藤枝

〈遊花園〉といふ老人施設の状況をくわしく聞くことが出

来て、良い勉強が出来た。何れかわりを持つことも。

柏支部／支部長 末次 房江 （山田記）

日時 7月16日（金） 12時30分～3時

場所 アミューゼ柏

出席 13名 出詠 10首

司会 山田 紀子

全国大会で表彰された塚本正子さんと富永道子さんへ改め

て拍手を贈った後、歌会に移った。久々の見学者三名をまじ

え、一首づつの歌評の後、新しい試みとして女流歌人の小島

ゆかり、川野里子の歌の鑑賞をし、充実した歌会になった。

・変わりなき口調テンポの棹売りの二度も通るなけだるき午

後を

富永 道子

水戸支部

支部長／長須 正文

日時 7月18日(日) 10時～13時

場所 岩間公民館

出席 6名 出詠 10首

司会 塩田 秋子

暑い日にもかかわらず6名が集り熱心な会になりました。

8月はお盆に当たる為休会としましたが、詠草一首は提出し、お互いの勉強会とします。

・ミニトマト一日三つ枝に熟れ一つづつ載る家族の皿に

塩田 秋子

大田支部

支部長／庄司 久恵

日時 7月26日(月) 13時～16時30分

場所 山王高齢者センター

出席 9名 出詠 8首

司会 長沼 温代

猛暑の中、三木先生もご出席戴き、9名で会を進めた。最初

に、先生より徒然草の講読と長歌の作り方を教わった。次回、長歌に挑戦しようという事にした。

・生きのびてフォーム成りし家更にまた生きよと明き夏空の

川村 貴美

千葉支部

支部長／照山 好子

日時 7月17日(土) 13時30分～16時30分

場所 穴川コミュニティセンター

出席 15名 出詠 15首

(八代記)

司会 森 五貴雄

関東地方も梅雨明けが伝えられました。例会終了後、原田寛さんの歌集『ピエロの影』の出版記念会と夏一番に向け暑氣払いを行ないました。

・杖をつき犬引き家路辿りたる義父の自然に生きる安けさ

高崎 邦彦

・太書きの生家の屋号を読みし伯母まなこ輝く一瞬のあり

村田 孝子

掲示板

秋田八郎潟支部の小林絢子同人が、八月一日開催の第三回八郎潟短歌大会において講師特選第二位、互選で三位に入賞大慶です。

山中 律雄特選

・亡き人の表札の傾きを止して小さく「ただいま…」と言う

お詫びと訂正 八月号

十頁下段四行目 男茶畑↓お茶畑

十三頁下段三行目 小數↓少数

四十二頁上段十五行目 両足↓雨足

七月号

「わが愛する歌」(表2)の本文

十三行目 滝井幸作↓滝井孝作

ホームページへの参加について

丸山孝一郎

昨年十一月に太陽の舟短歌会のホームページ(H.P.)が誕生しましたが、ご覧になっておりますか。今のところ会員の

連絡、情報のある「会員のひろば」に投稿される方は限られております。まだ（HP）を開いたことがない方は、パソコンをお持ちの方は勿論、家族でパソコンを使用されている方がおいでなら、まず「太陽の舟短歌会」の（HP）を開いてみてください。

まずパソコン表紙のインターネットエキスプローラをクリックし「太陽の舟短歌会」と入力してください。すると「短歌の太陽の舟」「太陽の舟短歌会」の項目が出てきます。

どちらをクリックしても同じ内容ですが、「短歌の太陽の舟」をクリックしてみると表紙に「お知らせコーナ」が出てきて各月の歌会報告、が記載されています。また目次の「太陽の舟短歌会とは」では創立宣言、会則、短歌会の葉、「会員のブログ」では役員会の議事録、巻頭言などが記載されています。

これらをご覧になった後、（HP）の右側面にある「太陽の舟会員のひろば」「こちらから」をクリックしてください。「ユーザー名」と「パスワード」を記入してくださいと出ます。

この記入内容は会員のみ使用のため、山名さん、丸山などに聞いてください。この記入の後、名前、Eメール、適当なタイトルを入れてコメント（身近な話題、歌会の感想など自由）を記載して「投稿する」をクリックしてください。皆さんの投稿された話題が沢山現れてきます。会員同士の情報連絡、親睦を深める上でも「会員のひろば」の活用をお願いします。

（ホームページ担当）

会景サロン

父の思い出一つ

富永 道子

先日、実家の亡父の道具箱に、竹ヒゴ作りの大小の穴が並んだ鉄板を見つけた。丸い穴は時の経過と錆で少しづつ型が変わっていた。大工になりたかったと聞いたことがあったが、父が竹ヒゴを作る時、シューと音を立てて竹を引き抜く動作を機械のようだったと思った。

その竹ヒゴを使ってメジロ用の鳥カゴを作り、啼き比べを楽しむ為に、近くの山にメジロ捕りに出ては一羽づつ籠の鳥としていた。欲しがると、カゴごと誰にでもあげてしまうので、また、一本一本竹ヒゴ作りから始めていた。

海の近くに住んだ時には、防波堤に浮かべて釣餌のフナムシを飼うカゴも作った。知り合いの漁師たちから頼まれてもいたらしく、時々魚だらけの食卓はカゴが出来上がった日だったのかもしれない。

私は小学三年生のある日。校庭での全校朝礼が終ると「麻疹のようだ。帰らない。」と促されて、誰もいなくなった太陽いっぱい校庭をとぼとぼと下校しました。その日は、米飯以外を弁当とする日で、父が編んでくれた小さな竹の手さげに、さつま芋二つを入れて登校した日でした。

何月何日のことだったのか、ハシカの程度はどうだったのか、あのさつま芋はどうしたのか、何も記憶していませんが、弁当用にと編んでくれたあの真新しい小さな竹カゴだけは、ひなたの中で竹ヒゴを抜いていた父の姿と共に忘れられません。